

視覚で楽しむ

四角い「涼」をお届け



美しい縞模様は見ている人に清涼感を与えます

初夏の風物詩

—全国初『観賞用スイカ』の歴史—

夏の訪れを告げる普通寺市を代表する特産品「四角スイカ」。4月上旬に苗を植え、5月下旬にはだんだん実が大きくなり、特殊な鉄枠に入れて形を整形していきます。現在、JA香川県普通寺西瓜部会には、9軒の農家さんが所属し、年間約500個の四角スイカが出荷されています。今年も6月下旬に筆岡集荷場で初出荷が行われ、日本全国だけでなく、海外にも出荷され、見て楽しむスイカとして人気の商品となっています。

始まりました。初めは『食用』の四角いスイカとして売り出す予定でしたが、未成熟の段階で、枠入れを行い、完熟する前には不向きでした。それでも、全国にどこにもない四角いスイカを全国初の『観賞用』として、売り出したところ、その珍しさに全国から注文が入るようになり、どんどん四角スイカが普通寺市以外の各地で見られるようになりました。

四角スイカ誕生の秘話

四角い理由は「冷蔵庫に収まりやすいから!」

四角スイカの誕生は、今から約50年前。元々スイカの生産が盛んであった筆岡地区で値下がりするスイカに何か付加価値を加えて販売しようとしたことが四角スイカ誕生のきっかけでした。当時、「丸いスイカではなく、四角いスイカなら冷蔵庫に収まりやすいのでは」というユニークな考えから、四角スイカの生産が



未成熟の状態でも、1つずつ丁寧に枠入れ作業を行います。

生産するのは至難の業

細心の注意が必要

一言で四角スイカといっても、丸いスイカを四角くすることは非常に難しく、出荷までに多くの手間がかかることを「存じて」しょうか。通常の丸いスイカであれば、1本の苗から3個ほど実ができますが、四角スイカを生産するためには、1本の苗に実が1個だけ残るように間引き、栄養分を一か所に集中させます。中には、小さい実を見極める中で、1個も四角スイカにならない苗もあります。農家さんたちは長年の経験から、一番良い状態で成長しそうな実を厳選しています。



縞模様的美しさは農家さんの技

厳選された実でも、大雨や風でわらが当たっただけで表面に傷が付き、商品にならなくなってしまう。出荷されるまでは細心の注意を払いながら作業が行われています。きれいな縞模様も農家さんが計算して枠に入れた証であり、収穫のタイミングもスイカの成長に合わせて「1つひとつ調整」しています。

生産者の想い

「高級品だからこそ、少しでもいい品物を」

普通寺西瓜部会の山下部会長と夫婦は、1個一万円以上する高級品だからこそ、少しでも傷をつけることなく、いい品物を生産し商品を長持ちさせることを日々意識しているそうです。四角スイカは夏を過ぎても同じ形状を保ち、記録としては、1年7か月の間、観賞用として展示され続けたこともあります。品質にこだわる生産者さんの努力があるからこそ、長い観賞期間につながっています。

過去にはカナダやロシア、フウエートでも販売した実績もあり、海外でも人気商品になりつつある四角スイカ。山下部会長は、今後もっと海外向けへの販路開拓を行い、将来的には四角スイカの生産者を増やしていきたいと話してくれました。四角スイカを見かけた際は、清涼感を味わうと同時に、生産者さんの想いも想像してみてください。

【四角スイカ収穫行程】



枠いっぱい大きく実った実を探します



スイカと苗を慎重に切り離します



枠の頑丈なボルトを外します



枠をすべて外すまで気が抜けません!



出荷へ
【山下博子さん、山下敏行さん】